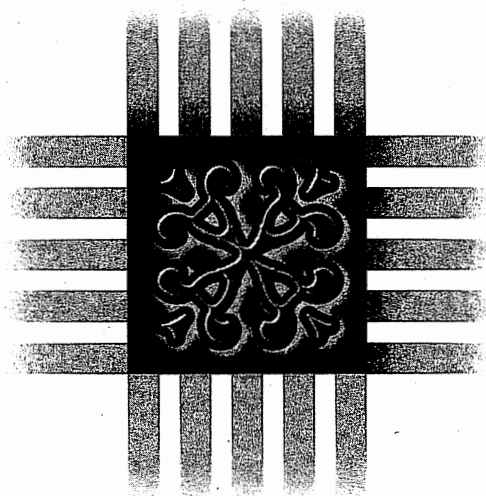


日本の地誌 7

中部圏

愛知県・静岡県・岐阜県・三重県・
富山県・石川県・福井県

藤田佳久・田林 明 編



朝倉書店

■編集者

藤田佳久 愛知大学文学部・教授

田林 明 筑波大学大学院生命環境科学研究科・教授

■執筆者 (執筆順)

藤田佳久 愛知大学文学部・教授

溝口常俊 名古屋大学大学院環境学研究科・教授

海津正倫 名古屋大学大学院環境学研究科・教授

寺本 潔 愛知教育大学教育学部・教授

林 上 名古屋大学大学院環境学研究科・教授

伊藤貴啓 愛知教育大学教育学部・准教授

北川博史 岡山大学大学院社会文化科学研究科・准教授

小林浩二 岐阜大学教育学部・教授

有蘭正一郎 愛知大学文学部・教授

阿部和俊 愛知教育大学教育学部・教授

高橋 誠 名古屋大学大学院環境学研究科・准教授

伊藤達也 金城学院大学現代文化学部・教授

岩崎公弥 愛知教育大学教育学部・教授

塩川 亮 静岡大学教育学部・教授

西原 純 静岡大学情報学部・教授

國澤恒久 日本女子大学附属中学校・教諭

池 俊介 早稲田大学教育・総合科学学術院・教授

合田昭二 岐阜大学地域科学部・教授

大関泰宏 岐阜大学教育学部・教授

馬淵旻修 岐阜県立郡上高等学校・校長

安田 守 岐阜県立華陽フロンティア高等学校・校長

高木俊明 岐阜県教育委員会教職員課・課長補佐

滝村一彦 岐阜県図書館世界分布図センター・課長補佐

西村三紀郎 岐阜県立華陽フロンティア高等学校・教諭

宮崎 清 三重大学教育学部・教授

鹿嶋 洋 三重大学人文学部・准教授

大喜多甫文 前 三重大学人文学部・非常勤講師

安食和宏 三重大学人文学部・教授

田林 明 筑波大学大学院生命環境科学研究科・教授

五味武臣 金沢大学教育学部・教授

田上善夫 富山大学人間発達科学部・教授

梶川勇作 金沢大学文学部・教授

杉浦真一郎 名城大学都市情報学部・助教

山根 拓 富山大学人間発達科学部・准教授

林 琢也 筑波大学大学院生命環境科学研究科

水嶋一雄 日本大学文理学部・教授

若林芳樹 首都大学東京都市環境学部・准教授

須山盛彰 元 富山県立富山東高等学校・校長

仁平尊明 筑波大学大学院生命環境科学研究科・講師

助重雄久 富山国際大学地域学部・准教授

須山 聡 駒澤大学文学部・教授

古川春夫 前 富山県立富山中部高等学校・教諭

新藤正夫 砺波散村地域研究所・所長

山下亜紀郎 酪農学園大学環境システム学部・講師

神谷浩夫 金沢大学文学部・教授

府和正一郎 金沢大学共通教育機構・非常勤講師

丸山浩明 立教大学文学部・教授

吉川博輔 仁愛女子高等学校・非常勤講師

林 和生 國學院大学文学部・教授

田中和子 京都大学大学院文学研究科・教授

海道静香 福井県立高志高等学校・教諭

佐野光臣 前 福井県立勝山高等学校・教諭

田中完一 前 福井県立藤島高等学校・校長

せようとする施策である。これにより、衣料雑貨販売などの20以上の店舗が、中心商店街で新規開業した。同TMOはほかにも、駅、市街観光スポット、役所や病院、中心商店街などの間を、高頻度で安価に結ぶコミュニティバスの運行（2001年3月開始）やIT・デザイン関係のインキュベータオフィス開設などのまちづくり事業にも関わる。一方、市当局も市街地再開発事業を進め、中心商店街は立体駐車場付の大規模商業ビルや住宅ビルなどに順次更新されている。また、市はJR富山港線のLRT（Light Rail Transit）化（第三セクターの富山ライトレールに運営移管し2006年4月開業）と富山地铁富山市内線（路面電車）の延伸・環状線化、そして両線の結合などを計画し、市北部の港湾・工業・観光地区である岩瀬地区、再開発された富山駅北地区、旧市街地の間の公共交通による有機的結合を目指している。

高岡市では1980年代以降4次の市街地再開発事業が実施され、中心部にホテル、百貨店、商業ビル、立体駐車場、住宅、文化施設などの複数機能が同居した高層の再開発ビルが複数建設された。また、市は2001年10月、中心市街地内の駅、中心商業地区、山町筋、金屋町、高岡大仏などの観光地、公共施設などを結ぶコミュニティバス運行の開始や万葉線の第三セクター化（2002年）による公共交通整備を手がけてきた。このほか、商工会議所も市街地活性化策として、中心商業地の空店舗情報公開事業や中心商店街での朝市開催を進めた。

こうした中心部活性化、再開発施策はいずれも一定程度評価されるべきものではあるが、まだハード・ソフト両面で不十分といわざるをえない。それは、郊外の開発傾向が一向に終息しないためである。富山郊外では今も大規模商業施設出店が計画され、高岡ではイオン高岡付近に北陸新幹線の新駅が設置される。「中心一周辺」の地域内競合関係という中心部空洞化の根本要因が温存される現状では、中心市街地再活性化の前途は多難である。

（e） 地方都市空間の現状と持続可能性

郊外化と対をなす中心市街地問題は、今や全国の地方中小都市に遍在する。これは、以下の点で地域社会にとって好ましい事態とはいえない。まず、この一連の動きは地方都市中心地区の人口や機能を剥奪し、既存の共生的な社会空間を破壊した。次に、規制緩和下の自動車依存型郊外地区で域外大規模資本が用意する

商工業・生活の空間は、自動車生活者のライフスタイルを促進する反面、それに不適応な市民を結果的に排除し、市民に「開かれた公共空間」とはならない（北村，2005）。外部資本主導の建造環境は地域外の価値を反映し、市民主体の自立的持続的な地域形成の論理と相容れない。都市のなかで本来補完し合うべき中心と郊外が競合関係を強いられることで、地域の持続的発展は蝕まれる。持続可能なコンパクトシティへの構造転換の政策化が、富山・高岡をはじめとする地方自治体において急務となろう。（山根 拓）

2) 富山平野

（1） 土地基盤と農業

（a） 扇状地性平野と農業的土地基盤の整備

富山県の山地は東に高く、南から東にかけて低くなり、その間に富山平野が広がっている（図V.A.2.10）。富山平野は中央部の^{くれほ}呉羽丘陵によって東西に二分され、東では黒部川、片貝川、早月川、常願寺川、神通川などによる扇状地が複合して呉東平野を形成している。他方、西の呉西には庄川と小矢部川によって形成された砺波平野と、その北の三角州性の射水平野が広がっている（深井，1958）。二上丘陵の北には、潟湖が埋積された水見平野があり、これは富山平野から独立した平野とみなされている。経済企画庁総合開発局国土調査課（1973）の地形区分によると、富山県における低地のほとんどは富山平野にあるが、総低地面積987 km²のうち86.7%が扇状地性低地であり、12.6%が三角州性低地、0.8%が自然堤防あるいは砂丘となっている。

富山平野における水稻作は、三角州性平野や扇状地縁辺の山麓や段丘沿いの地域、そして扇端部から始まった。扇状地性平野のほぼ全域に水田が広がったのは、加賀藩とその支藩である富山藩がこの地域を支配するようになり、大河川の豊かな水を統一的に制御・活用することができるようになってからである。明治期以降も農業水利事業をはじめとしてさまざまな土地改良事業が進められ、今日みられるような高い生産性を誇る農業地域ができあがった。明治期以降実施された主要な土地改良事業としては、明治末期から昭和初期にかけての用水合口事業、第二次世界大戦後の幹線用水路改修と流水客土事業、そして1960年代後半か

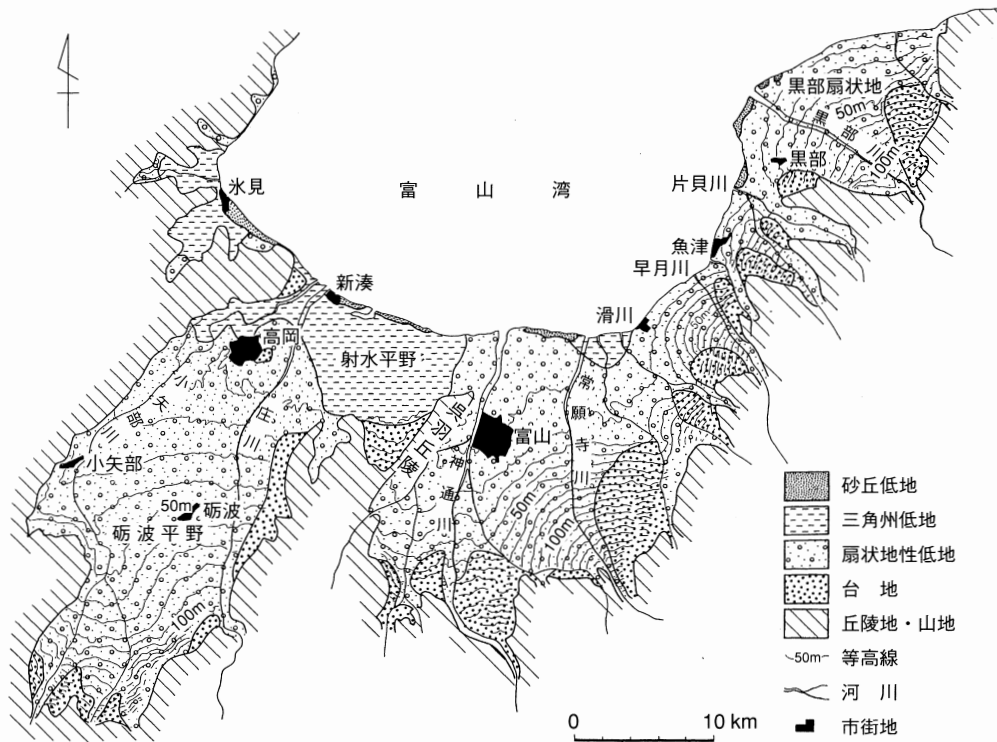


図 V.A.2.10 富山平野の地形分類

(資料：経済企画庁総合開発局国土調査課 (1973)：20 万分の 1 地形分類図，および籠瀬良明 (1981)：『黒部川扇状地』より作成)

ら 1980 年代初めにかけて実施された圃場整備事業や排水事業などがあげられる (田林, 1990)。合口とはもともと加賀藩の土木用語であるが、河川からの用水の取入口を統一することによって取水量を確保し、かつ合理的に配分しようとするものであった。また、流水客土事業とは赤土を微粒化し、汚泥水として既設の灌漑用水路に流し、水田に流送沈殿させるものであった。これによって、土壌の改善と田面からの水の浸透量を少なくして冷水害を軽減することができるようになった (籠瀬, 1981)。さらに、1970 年代に富山平野で盛んに行われた圃場整備事業は、水田の 1 区画を 30 a に拡大するとともに所有耕地を集団化し、農道や用排水路を整備するものであった。これによって、農業の機械化を進め、農業経営を近代化しようとするものであった。結果として、2000 年には富山県の水田の約 80 % が 30 a の標準区画で圃場整備された。

(b) 水稲単作と通勤兼業

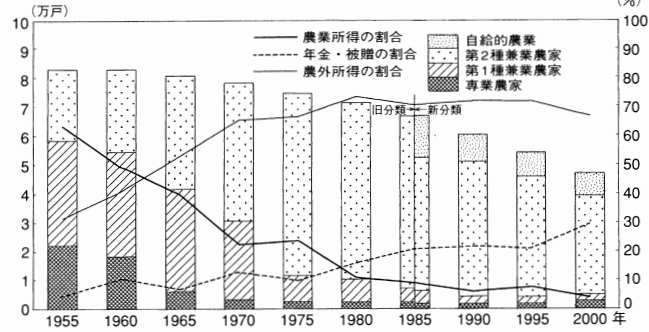
富山平野では多くの人々がいまだに農村に住んでいる。それは、2000 年の農業センサスによる富山県の農家人口の割合が 19.5 % であり、全国の 10.6 % の 2

倍近いことから理解できる。しかし、富山平野の農村の性格はかならずしも強いとはいえない。それは、富山平野の農業が必要労働力の少ない水稲作中心であり、そこには通勤兼業が広く浸透していることから明らかである (田林, 2003 a)。

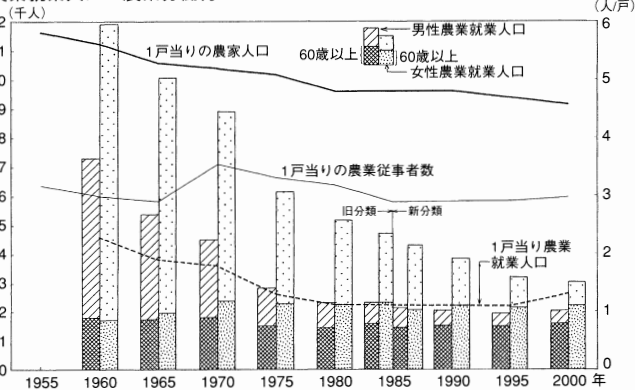
2000 年の農業センサスによると、富山県では稲作を農産物販売額第 1 位の経営部門とする農家の割合が 95.1 %、稲作単一農家の割合が 97.1 % にのぼっている。また、2002 年の実績によると、水田率は 95.9 %、農産物販売額に占める米の割合は 72.5 % であり、全国平均がそれぞれ 54.7 % と 29.4 % であったことと比較すると稲作の優位は明確である。

富山平野は冬季の積雪によって農作業が制限されるために、古くから農外就業が盛んであった。冬の農閑期を利用して、一家の家計を支える世帯主が長期にわたって、出稼ぎに従事した。富山市や滑川市の売薬はその典型であった。しかし、大正期から昭和期に安価な余剰電力を利用する化学工業や電気精錬などが立地し、さらに経済の高度成長期には多くの農村工業が進出することによって、農家兼業の主体が出稼ぎから通

(a) 専・兼業別農家数・農家所得



(b) 農業就業人口・農業労働力



(c) 水稻作付面積・収穫量

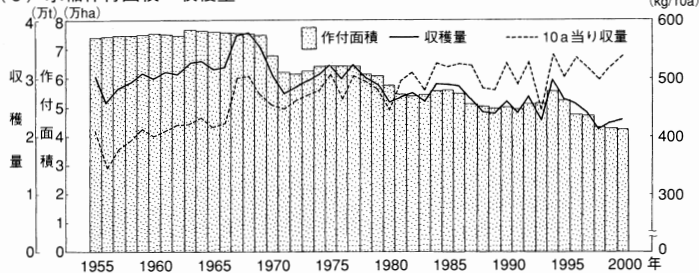


図 V.A.2.11 富山県農業の変遷

(資料：農業センサス，農業経営統計調査報告，および作物統計より作成)

勤兼業にかわった。2000年の農業センサスによると富山県の販売農家39,397戸のうち34,559戸が第2種兼業農家であり、このほかに7,830戸が自給的農家であったため、これを合わせると89.8%が農業への依存の程度の低い農家といえよう。家としての主な兼業種類としては、ほとんどが恒常的勤務である。2003年の富山県の販売農家1戸当たりの農家総所得は9,804.9千円であり、そのうちの農業所得は4.5%にすぎなかった。

近年の富山県の農業変化を主要指標によって示したのが図V.A.2.11である。これによると1960年代に

まず専業農家が減少し、ついで1970年代に第1種兼業農家が減少するとともに第2種兼業農家が増加し、1990年代になると農家数自体が減少したことが明確である。また、1960年代から1970年代までに農外収入の増加と農業収入の減少、1980年代から1990年代の農外収入が停滞するとともに年金・被増などの収入が増加した。1970年代から1980年代までは農業就業人口も大きく減少し、1990年代以降は農業労働力の高齢化が進行した。水稻作付面積は1969年までは75,000ha前後で安定していたが、それ以降米の生産調整によって減少の一途をたどっている。また、収穫

量も作付面積の動向を反映して減少しているが、単位面積当たりの伸びによって部分的に相殺されている。全体としてみると1960年代までの伝統的農業の時代、1970年代と1980年代の兼業農業の時代、そして1990年代からの農業後退の時代が明確にわかる。

(c) 農業の地域差

富山平野の農業は水稻作中心であるが、水稻生産性の推移から一般に三つの地域に区分されてきた。第1の地域は1910年前後(明治末期)にすでに10a当たり375kgの高い生産力水準にあり、その後1950年代まで下降傾向を示すが、自然条件や経済条件に恵まれ稲作技術も高く、常に先進農業地域としての役割を果たしてきた砺波平野である。砺波平野では明治期に慣行小作権が確立し、小作料が固定され、生産力上昇による増加分が小作権者のものとなり、他の地域よりも経済的に優位にあった。また、砺波平野では大正中期にはすでに多くの恒常的安定兼業があり、他の地域では日雇いや出稼ぎなどの不安定兼業が多かったことと大きく異なっていた。第2の地域は1910年前後には225kgという低水準であったが、1915年頃には300kg水準に至ったが、その後1950年代まで長期に停滞したのち、急速に上昇して1970年代には富山平野でも最も生産性が高くなった黒部川扇状地に代表される呉東平野である。第3の地域は1910年前後の300kg水準から1915年前後に375kg水準に上昇し、その後1950年代まで停滞したのち、呉東地域ほどではないが急上昇した射水平野と氷見平野である(農林省北陸農業試験場農業経営研究室, 1967)。

砺波平野と呉東平野は、いずれも扇状地性平野であり砂質浅耕土からなるが、前者は耕土が比較的厚く壤土に近い肥沃地であり、灌漑水温も比較的高かったのに対して、後者は極端な砂質浅耕土のやせ地であり、また灌漑水温も低かった。それに対して、射水平野や氷見平野は低湿な三角州平野で、第二次世界大戦後に排水事業が実施される以前は強湿田が多く、粘質土壌が卓越していた。1980年代までの富山県稲作技術指針には、このような自然条件の違いに応じて、砺波平野と呉東平野、そして射水・氷見平野で異なった稲作技術体系が示されていた。呉東平野はさらに黒部川扇状地と片貝川・早月川扇状地、そして常願寺川・神通川扇状地に細分されていた(富山県農林水産部, 1981)。

第二次世界大戦後の各種の土地改良事業や農業技術

の進歩、通勤兼業の浸透によって富山平野における農業の地域差は小さくなったが、基本的にはすでに述べた三つの地域の差は依然として存続している。図V.A.2.12は2000年の農業センサス農業集落カードに基づくものであるが、まず、第2種兼業農家率は呉東平野では相対的に低く、砺波平野や射水・氷見平野では高いことがわかる。また、農家当たりの基幹的農業従事者数は呉東平野で最も多く、砺波平野がこれに次ぎ、射水平野ではきわめて少ない。農家当たりの経営耕地面積は、黒部川、早月川、常願寺川、庄川の各扇状地の扇頂から扇央にかけてでは1.5ha以上と大きい。東部を除く射水・氷見平野の大部分では1ha未満と小さくなる。2000年から2004年間までの単位面積当たりの収量をみると、黒部川扇状地で最も高く、砺波平野と射水平野がこれに次ぎ、呉東平野西部と氷見平野はやや低い。このような状況を踏まえて、以下では射水平野と黒部川扇状地と砺波平野を取り上げる。

(田林 明・仁平尊明)

(2) 射水平野の乾田化と営農環境の変化

(a) 第二次世界大戦前における排水改良

射水平野は神通川と庄川にはさまれた東西約11km、南北約7kmの平坦地である。この地域は縄文海進の際に入り江となったが、その後の海退と沿岸洲の発達に伴って潟湖(古放生津潟)と化した。古放生津潟は小河川が運んできた砂礫によって次第に埋積され、放生津潟を除く部分が陸地化して射水平野が形成された。低湿な平野(最低水面は海拔0.13m)はほぼ全域が湿田で、かつては腰まで泥水に浸かって農作業をしたり、「イクリ」と呼ばれる舟で苗、肥料や収穫したイネを運搬したりする光景がみられた。潮位が高くなる夏季は排水が困難となり、大雨のたびに湛水被害が発生していた(作道郷土史編集委員会編, 1989)。

1917(大正6)年に射水郡長となった南原 繁(のちの東京大学総長)は射水平野の湛水の凄まじさと農民の窮状に驚き、1918(大正7)年3月、井上県知事に「排水計画に関する件上申」を提出した。県はこれを受けて同年中に排水設計書を作成し、以後30年間にわたり県営事業による河川改修や放生津潟の防波堤改修、堀切制水門の設置などを行った。しかし乾田化などの農地改良は進まず、1955年においても水田の98.8%を湿田が占めていた。湿田は乾田に比べて作

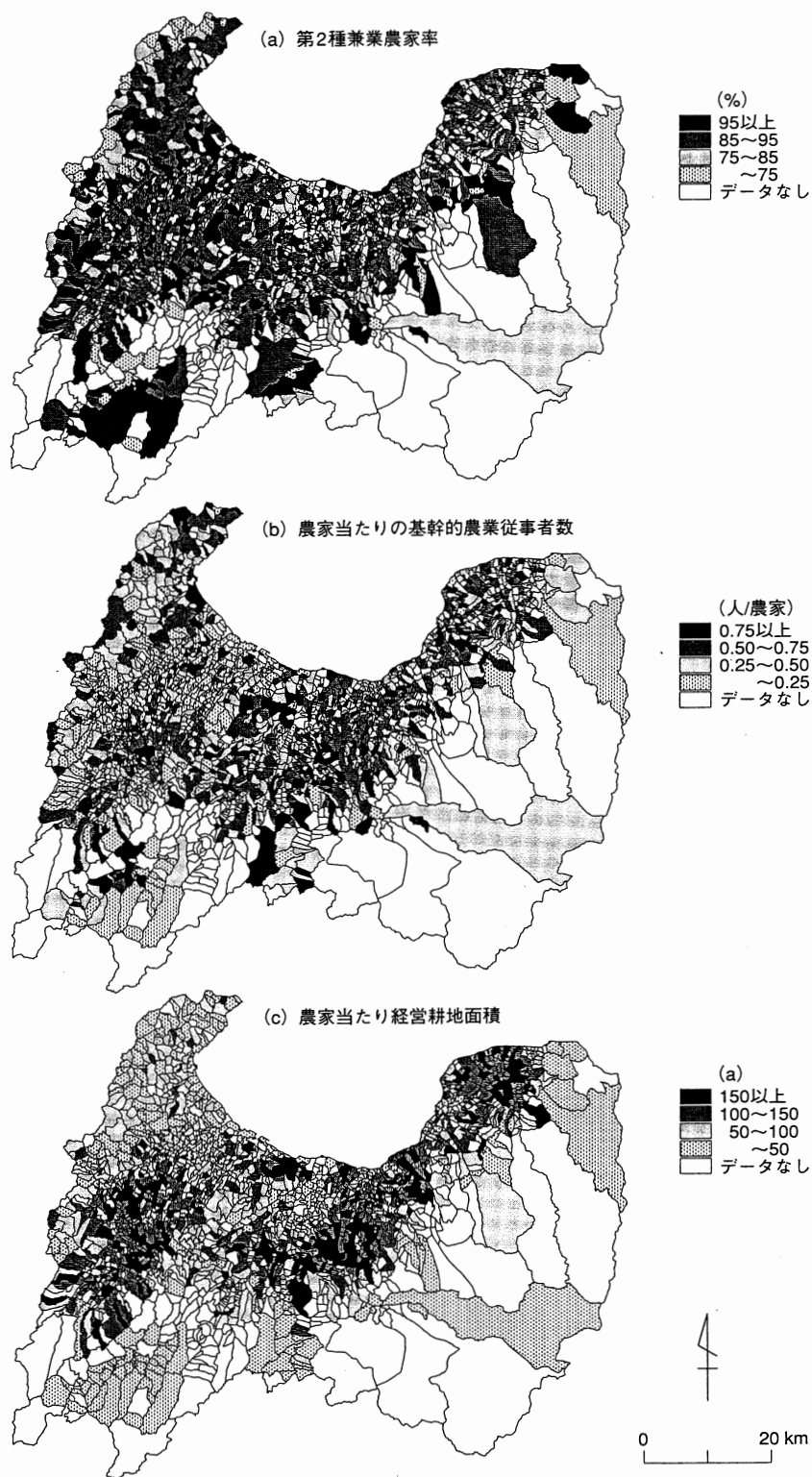


図 V.A.2.12 富山県農業の地域差 (2000 年)
(資料：農業センサス農業集落カードより作成)



図 V.A.2.44 相倉合掌集落 (平村役場提供, 2004 年春撮影)

晴らしさに驚嘆する者も多かった。合掌造り家屋の文化的価値については、戦前日本を訪れたドイツの著名な建築家ブルーノ・タウトによって紹介されていたが、1958 年によく岩瀬家、村上家と田向の羽馬家の合掌造り家屋が「国指定重要文化財 (建築物)」に指定された。1965 年には平村の相倉が「国史跡越中五箇山相倉集落」、上平の菅沼が「国史跡越中五箇山菅沼集落」に指定された。

ii) 世界遺産 相倉集落 世界遺産に登録された旧平村の相倉は、庄川左岸の標高約 400 m の高位段丘上に位置し、戸数 25 戸、人口 89 人の集落で、民宿が 10 戸、土産物店が 3 戸あり、集落の背後にはブナ、ミズナラ、トチ、カツラなどの大木が茂る雪崩防止の雪持ち林がみられる。伝統的建築群の主体は 20 棟の合掌造り家屋である (図 V.A.2.44)。これと非合掌木造家屋、土蔵、板倉、神社、寺院など 67 棟の建物、5 件の石像工作物によって遺産対象の伝統的建造物群が構成されている。集落内には畑と水田があり、石積みの畦畔に囲まれた小さな水田は 1948 年頃から桑畑を開墾したものである。遺産面積は屋敷地と周辺の耕地、背後の雪持ち林を含む 18 ha である。相倉集落への交通は国道 304 号より村道が通じ、集落の入口に有料駐車場があり、見学者はここから徒歩で集落内に入る。相倉は上梨と並んで旧平村で最も早く観光事業に取り組んだ集落であり、世界遺産となってから観光客が増加している。

iii) 世界遺産 菅沼集落 旧上平村の菅沼集落は、谷間を大きく蛇行する庄川の右岸、標高約 330 m の小さな低位段丘上にある。戸数 8 戸、40 人が住む小さな集落で遺産面積も 4.4 ha と小さい。遺産の範囲は屋敷地と段丘面上の田畑、山林に限られ、背後の

ブナ、ミズナラ、トチの大木が茂る雪持ち林は遺産の範囲に含まれていない。合掌造り家屋が 9 棟あり、うち 2 棟が資料館に利用されている。集落内には民宿 1 戸と酒屋 1 戸あるのみで、他の家は観光から直接の収入がなく、世界遺産を活用した動きもみられない。集落のすぐ上を国道 156 号が通り、合掌集落を身近に一望できることから、世界遺産指定後、集落に立ち寄る観光客が増加した。シーズンには狭い集落内は人で溢れ、住民の車の通行も困難となり、農作業の様子や暮らしのなかにまでカメラが向けられるなど住民の不満も多く、生活権の維持との調和が問題となっている。

iv) 民謡の里 平家の落人伝説がある五箇山には、厳しい自然のなかでの暮らしを心豊かに歌ったすぐれた民謡が数多く伝承されている。その一つである旧平村の麦屋節には、紋付羽織袴姿の勇壮な笠踊りがあり、1952 年に「五箇山麦屋節踊り」として国選定の無形文化財に指定されている。また 1969 年には「こきりこのうた」が文部省の中学校の音楽教材に採用されて全国に広がるなど、ほかにも旧上平村の「といちんさ」や「お小夜節」、旧平・旧利賀村の「古代神」などがある。毎年 9 月 22・23 日には平村下梨で「越中五箇山民謡祭」、26・27 日には上梨で「こきりこ祭り」が催され、多くの観光客が訪れる。

(新藤正夫)

文 献

- 五十嵐 篤 (1996)：富山市における中心商店街の構造変化一経営者意識との関連性を含めて、人文地理, 48, 468-481.
 小笠原和夫・深井三郎 (1962)：称名滝を中心とする地域の地形発達史。立山・称名滝総合学術調査団編『立山一称名滝とその溪谷を探る一』, pp. 74-100, 富山新聞社。
 奥村秀雄 (1994)：『基石の歩み』(自費出版)。
 籠瀬良明 (1981)：『黒部川扇状地』, 古今書院。
 上平村役場 (1987)：『上平村誌』, 上平村役場。
 川澄隆明 (2000)：氷成堆積物と火山噴出物からみた立山における後期更新世前半の氷河前進期。地理学評論, Ser.A, 73, 26-43。
 北村隆一 (2005)：脱自動車の都市モデル。植田和弘・神野直彦・西村幸夫・間宮陽介編『岩波講座 都市の再生を考える 5 都市のアメニティとエコロジー』, pp. 69-97, 岩波書店。
 金田章裕 (1970)：砺波平野における中世開発と表土との関連についての若干の考察。人文地理, 22, 420-437。
 金田章裕 (1985)：『条里と村落の歴史地理学的研究』, 大明堂。
 金田章裕 (1986)：砺波散村の展開とその要因。砺波散村地域研究所研究紀要, 3, 1-11。
 金田章裕・藤井 正編 (2004)：『散村・小都市群地域の動態と構造』, 京都大学学術出版会。
 楠瀬 勝監修・編 (1997)：『小杉町史 通史編』, 小杉町。
 久保尚文 (1984)：『越中における中世信仰史の展開』, 桂書房。

- 経済企画庁総合開発局国土調査課 (1973):『縮尺 20 万分の 1 土地分類図付属資料 富山県』, 経済企画庁総合開発局国土調査課。
- 河野昭一 (1981): 立山の植生と植物相。立山連峰の自然を守る会編『立山の自然—その開発と自然保護—』, pp. 16-40, 立山連峰の自然を守る会。
- 佐伯安一 (1988): ぐらしの歴史からみた屋敷林。砺波散村地域研究所研究紀要, 5, 11-16。
- 正印清逸 (1981): ライチョウ。立山連峰の自然を守る会編『立山の自然—その開発と自然保護—』, pp. 68-76, 立山連峰の自然を守る会。
- 鈴木景二 (1999): 立山信仰と雄山山頂の遺物。富山大学人文学部紀要, 30, 1-15。
- 須山 聡 (1992): 北陸地方における丘陵地農村の就業構造—富山県水見市子浦・坪池地区の事例—。人文地理, 44, 82-97。
- 須山盛彰 (2000): 城下町から中核都市へ—富山市。平岡昭利・野間晴雄編『中部 II 地図で読む百年』, pp. 59-64, 古今書院。
- 平村役場 (1990): 『越中五箇山平村史 上・下』, 平村役場。
- 高瀬寿恵 (2002): 富山県の通勤・通学における自家用車の利用について—自家用車の利用が多く、公共交通機関の利用が少ない—。とやま経済月報, 8 月号。 (<http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/ecm/back/2002aug/tokushu/index3.html>)
- 田中 晋 (1981): 立山の湖沼と水質。立山連峰の自然を守る会編『立山の自然—その開発と自然保護—』, pp. 82-94, 立山連峰の自然を守る会。
- 田林 明 (1990): 『農業水利の空間構造』, 大明堂。
- 田林 明 (1991): 『扇状地農村の変容と地域構造—富山県黒部川扇状地農村に関する地理学的研究—』, 古今書院。
- 田林 明 (2003 a): 『北陸地方における農業の構造変容』, 農林統計協会。
- 田林 明 (2003 b): 黒部川扇状地における稲作農村の変容—入善町浦山新地区の 40 年—。人文地理学研究, 27, 203-248。
- 作道郷土史編纂委員会編 (1989): 『私達の集落作道』, 新湊市作道自治会。
- 利賀村 (2004): 『利賀村史 3 近現代』, 利賀村。
- 砺波郷土資料館編 (1996): 『砺波平野の屋敷林』, 砺波市立砺波散村地域研究所。
- 砺波市五十年史編纂委員会編 (2004): 『砺波市五十年史』, 砺波市。
- 砺波市立砺波散村地域研究所編 (2001): 『砺波平野の散村』, 砺波市立砺波散村地域研究所。
- 富山射水平野土地改良区編 (1992): 『県営ほ場整備事業射水東部地区事業誌—園場大成—』, 富山射水平野土地改良区。
- 富山県 (1972): 『県営新屋地区園場整備事業誌—新しい村造りの記—』, 富山県。
- 富山県総務部地方課 (1961): 『富山県町村合併誌 (上・下)』, 富山県。
- 富山県農林水産部 (1981): 『昭和 56 年度稲作技術指針』, 富山県。
- 富山県婦中町町史編纂委員会 (1996): 『婦中町史 通史編』, 婦中町。
- 富山県婦中町町史編纂委員会 (1997): 『婦中町史 資料編』, 婦中町。
- 富山県八尾町町史編纂委員会 (1967): 『八尾町史』, 八尾町。
- 富山県八尾町町史編纂委員会 (1973): 『続八尾町史』, 八尾町。
- 富山県八尾町仁歩地区集落機能等強化推進委員会 (1997): 『仁歩郷土誌』, 八尾町中山間集落機能強化等推進委員会。
- 富山県山田村村史編纂委員会 (1981 年): 『山田村史』, 山田村。
- 富山市・富山商工会議所 (2004): 『歩行者通行量調査』, 2004 年 8 月 19・22 日実施。
- 中尾俊雄 (1973): 低山村におけるマイクロバスの背景。地域開発問題研究, 3, 1-3。
- 中島峰弘 (1999): 『日本の棚田—保全への取組み—』, 古今書院。
- 日本政策投資銀行富山事務所 (2002): 『クルマ社会』 富山の中心地拡充化への対応策—高齢化・環境制約・財政制約の中での中心地と郊外部のあり方—。日本政策投資銀行富山事務所。 (<http://www.dbj.go.jp/hokuriku/report/pdf/r0203t.pdf>)
- 日本地誌研究所・青野壽郎・尾留川正平編 (1970): 『日本地誌 10 富山県・石川県・福井県』, 二宮書店。
- 農林省北陸農業試験場農業経営研究室 (1967): 『富山県農業の展開過程』, 農林省北陸農業試験場。
- 水見市史編さん委員会編 (1999): 『水見市史 9 資料編』, 水見市。
- 水見百年史編修委員会編 (1972): 『水見百年史』, 水見市。
- 広瀬 誠 (1957): 黒部の湯道と明治初年の日本アルプス開拓。越中史壇, 11, 49-54。
- 広瀬 誠 (1971): 嘉永 6 年前田利保の西白木峯 (金剛堂山) 登山について。富山史壇, 50/51, 145-158。
- 深井三郎 (1958): 富山平野とその地形発達。地理学評論, 31, 416-429。
- 深井三郎 (1974): 『黒部立山アルペンルート』, 古今書院。
- 藤井昭二 (2000): 『大地の記憶 富山の自然史』, 桂書房。
- 藤森 勉 (1995): 交通体系の変化と富山市の発達。藤岡謙二郎監修, 木下 良・沢田 清・島田正彦編『北陸道の景観と変貌』, pp. 162-170, 古今書院。
- 藤森 勉 (1995): 富山高岡新産業都市。藤岡謙二郎監修, 木下良・沢田 清・島田正彦編『北陸道の景観と変貌』, pp. 171-179, 古今書院。
- 二神 弘: 富山。山口恵一郎ほか編 (1974): 『日本図誌大系 中部 II』, pp. 210-216, 朝倉書店。
- 増田準三 (1981): 気象。立山連峰の自然を守る会編『立山の自然—その開発と自然保護—』, pp. 14-15, 立山連峰の自然を守る会。
- 町田 洋 (1992): 『立山とその周辺地域における第四紀地史—とくに広域テフラを中心に—』, 富山県 [立山博物館]。
- 松井隆幸 (2002): 通勤でみた北陸の市町村の関係とその変化—国勢調査・従業地集計より—。とやま経済月報, 6 月号。 (<http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/ecm/back/2002jun/tokushu/index1.html>)
- 水谷秀樹・大川信行・西川友之 (1998): 明治後期における女性の立山登山と富山日報社の関係。富山大学教育学部紀要, A (文科系), 52, 11-22。
- 宗景 昭 (2005): 台風 23 号による砺波平野の屋敷林の被害とこれからの屋敷林について—パネルディスカッション—。砺波散村地域研究所研究紀要, 22, 78-95。
- 山根 拓 (2000): 再生をめざす歴史的商工業都市—高岡市とその周辺。平岡昭利・野間晴雄編『中部 II 地図で読む百年』, pp. 65-72, 古今書院。
- 山本正三・北林吉弘・田林 明編 (1987): 『日本の農村空間—変貌する日本農村の地域構造—』, 古今書院。

編集者略歴

ふじ た よし ひさ
藤 田 佳 久

1940 年 愛知県に生まれる
1967 年 名古屋大学大学院文学研究科
博士課程中退
現 在 愛知大学文学部教授
理学博士

た ばやし あきら
田 林 明

1948 年 富山県に生まれる
1975 年 東京教育大学大学院理学研究科
博士課程退学
現 在 筑波大学大学院生命環境科学
研究科教授
理学博士

日本の地誌 7

中 部 圏

定価は外函に表示

2007 年 4 月 25 日 初版第 1 刷

編集者 藤 田 佳 久
田 林 明
発行者 朝 倉 邦 造
発行所 株式 朝 倉 書 店
会社

東京都新宿区新小川町 6-29
郵便番号 162-8707
電 話 03(3260)0141
FAX 03(3260)0180
<http://www.asakura.co.jp>

<検印省略>

© 2007 <無断複写・転載を禁ず>

ISBN 978-4-254-16767-2 C 3325

壮光舎印刷・渡辺製本

Printed in Japan